活動紹介 6

平成30年度 あしたのまち・くらしづくり活動賞 主催者賞受賞

全ての人を独りぼっちにしない場づくり

東京都大田区 気まぐれ八百屋だんだん

気まぐれ八百屋だんだん 近藤 博子

「食」「歯」「健康」をつなげるきっかけに

歯科衛生士としての常勤の仕事から、パートに切り替え、自然食のお店を手伝う中で、たまたま舞い込んできた「週末の野菜の配達」の話に、これは、もしかしたら、「食」「歯」「健康」をつなげるきっかけになるかもしれないと思い、引き受けることにし「気まぐれ八百屋だんだん」という店名で始めたのは、2008年の11月でした。しかも、有機野菜で土付きの野菜の仕分けできる場所として借りたのが、2、3年空き店舗になっていた、元居酒屋でした。スタート時点では、純粋に週末だけの野菜の配達を行うことを目的にしていましたが、近所のおばあちゃんから「私たちにも元気な野菜を売って欲しい」という一言で、方向性が徐々に変化していきました。

平日も少しずつお店を開くようになりました。居酒屋の店舗でしたから、畳の小上がりもあり、買い物にいらした方々が、気軽に腰を下ろし、野菜の品定めをしながら、身の上話、子育ての悩みなど、様々な話をするようになり、井戸端会議の場へと変化していきました。

「ワンコイン寺子屋」「みちくさ寺子屋」を居場所スペースに

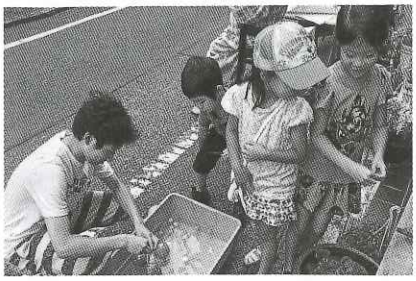
2009年には、自分の娘が、高校の勉強につまずいたことをきっかけに、子どもたちの学習サポートの活動「ワンコイン寺子屋」が始まり、地域の子どもたちとの関わりが始まり、そのおやつとして、味噌汁やおもち、やきいもなどを提供するようになりました。八百屋で寺子屋が面白いということで新聞に取り上げていただき、ボランティアの方々も増え、「みちくさ寺子屋」という、夕方に宿題ができるスペースとして、小上がりを無料開放し、学童保育のような時間も展開しました。

そのうちに、子どもの勉強を手伝っている大人が、「学び直し」をしたいということで、大人向けの学び直し教室が増えてきました。このような自然な流れの中で、子どもも大人もごちゃごちゃと集う場が、徐々に増えてくることになっていきました。

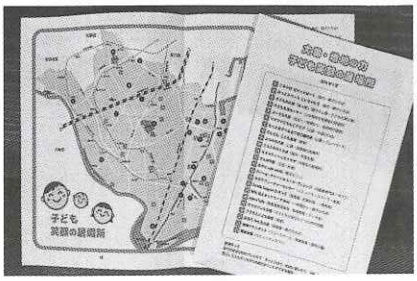
こども食堂

食べることは私たち地域が何とかする！

２０１０年、現在の大きなうねりにつながる、ある先生の一言に出会いました。買い物にいらした近所の小学校の副校長先生の「その年に入学してきた子どもの中に、お母さんがメンタルな病気を抱えていて、ご飯が作れない時は、学校の給食以外をバナナ１本で過ごしている子どもがいるのよ」というお話で、私の気持ちが大きく動かされました。バナナの皮をむいて一人で食べている子どもの後姿を想像して切なくなり、号泣してしまいました。先生が、おにぎりを作って保健室で朝ご飯を食べさせ、給食につないでいることを知り、食べることは、私たち地域が何とかする！ことを先生にお話をし、翌日から仲間と話を始めたのです。やろうということに決まったのですが、ロールモデルがなく、スタートまでには、なかなかまとまりませんでした。結果として、話に出た子どもは、児童養護施設に入り、このことが、私たちを大きく動かし、とにかく始めようと、スタートになりました。それが、２０１２年の夏でした。



小学生だった子どもが高校生になり、ボランティアをしている様子



地域の居場所マップで、活動団体をＰＲ

「こども食堂」と名付けて

「こども食堂」という名前は、子どもだけで入っても怪しまれない、あたたかく迎え入れてもらえる場所であることを強調したかったので付けた名前です。大人も入って、子どもたちを応援してねという意味も込めてあります。

この「こども食堂」の活動が、今では全国に広がり、これまでに例を見ないうねりとなってきています。そして、こども食堂が、共生の場としての役割も兼ねるようになりました。

多世代の交流の場にもなり、それぞれの活躍の場にもなり、情報共有の場、学校などを含む地域連携の拠点となり、行政では、手の届きにくいグレーゾーンへの関わりも持てるようになりました。

２０１５年には、「こども笑顔ミーティング実行委員会」を立ち上げ、子どもたち・親たちのために活動している方々のつながりづくりをスタートさせ、それぞれの持つスキルに光を当て、全ての活動が一緒に継続していけるよう、「居場所マップ」を作成し、黄色信号にならないよう働きかけをしています。

赤信号になりそうな場合は、民間で抱え込まないよう、行政との連携も少しずつできるようになりました。

全ての人が独りぼっちにならないように

大人も子どもも「全ての人が独りぼっちにならないように」をしっかりと柱にもち、どんな時も人のつながりを大切にして、ひとりひとりに光が当たるよう、私たちの活動は、裏方に徹していこうと思いながら、日々の生活に密着した取り組みを続けています。

今の社会で起きている、子どもの事件、大人の事件、自殺など様々な問題を自己責任で片付けようとすることにも疑問を感じ、全て社会の問題であること、子どもの問題は、全て大人の責任であることをみんなが気づけるような仕掛けづくりをしていこうと試行錯誤しています。

「人への想い」をたいせつにできる社会の再構築を目指し、身の丈に合った日々の活動を続けています。